

九、手札が揃った！

コタンからもどると、意外な人物がわたしを待ち受けていた。

「大前鹿次郎先生！」

わたしはなつかしきで胸がいっぱいになった。

「おお、馬之助。みちがえるほどくましくなったな。蝦夷での越冬はきつかったか」

「いえ、アイヌと友だちになって狩りに駆けまわっていたのです。ところで先生はどこに逃げていたのです？」

「いや、そう聞かれると恥ずかしいな。わたしはさる秘湯に隠れていた。だから毎日温泉三昧だった」

「ここがどうしてわかったのです？」

「おいおい、おまえの落ちのび先を今津屋に頼んだのは、このおれだよ。それにだ、ここにくるまえに函館の今津屋分店に寄って、おまえが無事、厚岸に渡ったことを確認してきた」

「函館から船で厚岸へ？」

「いや、釧路経由で歩いてきた」

「ひとりで？」

「いや、途中から道連れができた。厚岸にいくというので、同道した。面白い男だったから飽きなかったよ」

「先生。追っ手は？」

「大丈夫だよ。函館で今津屋に探らせたが、手配書や人相書きなどはまわっていないと、よ」

「おおっぴらに追われているのではないんじゃないですか、わたしたち。だって、わたしなんか、罪を犯したのではないんだから。先生は追われる理由はいっぱいあるでしょうけど」

「おいおい、自分だけいい子になるなよ。でも馬之助のいうとおりかもしれないな。わたしたちを泳がせて甚内殿をたぐりよせる作戦もあるしな」

もしかしたら、わたしを逃げさせたお杉も、一枚かんでいたかもしれないと、ちらと頭にかすめた。

「先生。父が生きているらしい、と江戸でいいましたね。あれは、どこからの話だったのです？」

「いまだからいうが・・あれは嘘なのだよ」

「え！　なんですって」

「だが、あのままでは雨宮家がつぶれることは事実。一応息子に父の探索をおこなわせて格好をつけ、それから馬之助に家を継がせる算段だった。生きていることにしなければ、おまえがいく気になるまい。それが思わぬ事態に発展した。つまり、幕府もなぜか甚内殿を探している次第となった。そして、巻き添えを食って、わたしま

で追われる身になった。まいったよ」

「わたしはここで、父のことを探りました。そして、どうやら、東の島のどこかにいるらしいのです。生きているかどうかはわかりませんけど、そこにむかったまま消息を絶った事実を突きとめました。追っ手が船でくるまえにここを去り、そこへむかうつもりです」

「そうか。じゃあ、おまえもぼんやりとここで泣いていたわけではなかったのだ」

「とんでもない。江戸の青雲塾では絶対学べないようなことを、たくさんこの地で学びました」

「いやはや、馬之助に厭味をいわれたな。わはは」

この先生とあの幻空さんとを引きあわせたら、さぞ痛快だろう、と思ったが、それはまもなく実現することとなった。

「馬之助。おまえ、ろくなものを食っていないだろう、ここでは」

猪平がいやな顔をした。馬之助の食事は猪平が作っている。

「どうだ、これからおれが投宿した宿にこないか？ うまいものを作らせてやるから、いっしょにこい。おれもまだ、旅装束を解いていないのだ。猪平もどうだ？」

猪平はさきほどのいやな顔を、どこかにやってしまった。

宿の二階からは海がみえた。厚岸の町には三軒の船宿がある。こは町ずれの宿だ。表には「船宿六郎太」の看板が、風で曲がってぶらさがっていた。土間には、売り物の草鞋や漁具、日用雑貨品も並べてある。この時期、泊まるものなどだれもない。客は大前鹿次郎とその連れの客しかなかった。連れの客は遠くにある露天風呂にいて、いないようだった。

まもなく、魚と貝の刺し身の盛り合わせがどっさり運ばれてきた。山菜や芋の煮つけなども各種、並んだ。鹿次郎先生は旅装を解いてくつろぎ、酒を一本頼んだ。猪平は隅のほうに控えている。

「おい、猪平、おまえも一杯どうだ。馬之助といっしょじゃ飲むわけにもいかなかったろう」

「へえ、でもあたしは田圃の蛙でして」

「蛙？ なんだそれは」

「へえ、下戸下戸」

「一杯くらいなら、いいだろう」

そのうち、一杯では済まず、一本でも済まず、ふたりともすっかり陽気になり、猪平の口から下手な都々逸まで飛びだした。

この危機意識のないふたりといっしょに、あの荒海を越えていけるだろうか、とわたしはだんだん心配になる。だが、そういうわたしも久しぶりの大御馳走に夢中になり、心配の種もどこかにいってしまった。

「江戸を去るまえにな、おまえの母上に最後の別れをいってきた。小田原でつつがなく生きておられる。ウイ」と、先生が酔うほどに潤んだ目になった。

「そうですか。それはよかった。お滝もいっしょですか」

「そう。で、おれはもう生きて帰れないかもしれない。だから、思いを遂げたいと口説いた」

「ウヘエ、お滝を、ですかい、先生も酔狂だ」と、猪平が冷やかす。もうすっかりできあがっている。

「ジョ、冗談じゃ、ないぞ、猪平。おれがずっと、ずっと、恋い焦がれておった麗しの、お、お園殿、だゾ」

「へえ、で、ド、どうなりやした？」

わたしはたちまち不愉快になった。わたしの母を酒の肴にしている。でも、だまって聞いていた。いくら不愉快でも、聞き逃すわけにはいかない。

「ソ、そしたらね」と、先生は懷から手紙をとりだした。「こんな文を貰った。これが鹿次郎様へのご返事です、だッテ」

わたしも黙ってはいられない。

「みせてください」

「母親の恋文を、だナ。その息子にみせるのは、キヨ、教育者のおれとしては、ちと、憚るな」

「なにをいっているのです。もう教育者としての道をとうにはずしていますよ」

「マ。そう怒るな。これがその文だ」と、わたしにみせる。文にはこう書いてあった。

しかと聞く

春のたよりに焦がれつつ

不二を仰ぎて、松はかなしき

「どう、思う？ 馬之助。どうもおれにはわからないのだ。だから、息子のおまえなら、母の気持ちに付度できるのではないか、と、マ、そう思っておまえに聞くのだ」

「どうしてわからないのです。先生のような学識者が、このくらいの短歌を」

「おう、やはりおまえには、ワ、わかるか」

「ええとですね・・はっきりと聞く春の訪れを待ち焦がれて、富士山をみあげる松の木の、かなしい風情を、これは詠んだのです。とても簡単明瞭じゃないですか！」

「甘い。だから、おまえはまだ、若い。だッテナ。これはおれの口説きに答えた返歌だよ。そんな、セ、銭湯の風景画みたいなことを

詠むはずがないだろう」

「じゃあ、どう解釈するのです？」と、わたしもだんだんむきになってきた。

「恋いの歌というのはナ、ずっと、奥が深いんだ。懸詞かけことばが幾つもあるんだ。だから、これはこう解釈する。いいか。

しかと聞く、の、しか、というのはダ、鹿次郎の鹿だ、つまりおれさまのことだ。そしてダ。春のたよりというのはダ、春の思い、つまり恋しい思いのことだ。不二は、無事、に懸けておる。そして松、は、待つ、に懸けておる。すると、こう解釈できる・・・

鹿様から聞きました。恋いの思いに焦がれながら、あなたのご無事をじっと待つのは、つらいわん。

と、こうなる。どうだ」

「つまり、先生の口説きが成功した、というわけですか？」と、わたしはきわめて面白くない。

「そういうことだな、ウヒヒ」

「ちょっとちがうな」と、いきなりうしろで、ふとい声がした。

「ナ、なんだ、貴僧は？」と、肩越しにのぞく片目の僧に、鹿次郎は目をぱちくりする。いつのまにか幻空さんが、そこにいた。

「わしは、この馬之助さんの知り合いだ。下に買い物に寄ったら、上から声が聞こえたのであがってきた。みなさんの話を聞いていたら釣りこまれちゃったよ。どれ、わしにもみせてごらん」と、文をのぞいた。

「鹿次郎先生、だったかな。お主の解釈は甘いよ。不二というのは、だ、二つとない人、つまり大切な夫だ。仰ぎて、は、尊敬する、だから、こうなる。

はっきりと夫の消息を聞くまで、春のうれしい便りをじっと待ちます。尊敬する大切な夫なので、かなしくとも待っています」

「ツ、つまり、おれは振られたわけだ。お園殿に」

「そうなるな、残念ながら。わはは」と、幻空さんは豪快に笑う。

「そ、そうですよ。わたしもそう解釈するな」と、わたしも幻空さんの肩を持った。

すると字が読めないから黙っていた猪平が、酔った声をだした。

「しかと、だって？ しかと、というのは、わだすのお国言葉では、あっかんべえ、の意味だべ」

みんな大笑いとなった。

「クソ！ われらが大和言葉というのは、なんて曖昧なんだ」と、鹿次郎先生が嘆く。

「分らないのに和歌ッだ、とはこれいかに」と、幻空さんが半疊を入れる。

そのとき、廊下を人影が過ぎた。

「おう、お連れさんよ。お帰り」と、鹿次郎先生が声をかけた。

「や。これは皆さん、賑やかなことで」と、顔をのぞかせた男をみて、わたしは啞然とした。あの鳥飼いだった。

「ア、紹介するよ。この若いのがわたしの塾生で、雨宮馬之助という。そしてそこに控えているのが、その従者の猪平。そしてこの片目の僧侶はと、ええと・・だれだっけ？」

「幻空という真言宗の僧だ。馬之助さんと蝦夷で知り合いになっ

「あっしはこの大先生と途中で旅の道連れになりましたて、吉蝶とい

「吉蝶さんとやら。こんな時節に蝦夷地まで？ なにか商いかい」と、幻空さんは聞く。さすがに適切な質問をする。

「へえ、あっしは鳥飼いでして。めずらしい鳥を探しに方々を歩くんです。蝦夷は鳥の宝庫ですからね。春一番をねらってやってきたのでさ」

「まあ、まあ、吉蝶さん。座って、一杯やろう。こんな猫もいやがるような寂しいところでは、賑やかにやるしかないな。アレ、もうないや。お姉さん！」と、先生は調子がいい。

わたしのことを鳥飼いが覚えているかどうか、気になった。だが、わざと黙っていた。鳥飼いは怪しい人物である。わたしは胸が騒いだ。間諜が早くもやってきたのだ。

酒がくると、また賑やかになった。幻空さんは酒は飲まないらしいが、調子を合わせながら、皿の料理にしきりに箸が走った。

「でも、妙ですな」と、鳥飼いもいささか酔っている。

「なにが？」と、先生が聞く。

「ほらね、猪平さんでしょ、鹿次郎先生でしょう、そしてわたしでしょう。このとり合わせ、ヘンでしょう？」

「ちっともヘンじゃないじゃないか。たかが飲んだくれの三人だ」

「そうですかね。猪、鹿、そしてあっしの蝶。ね。猪、鹿、蝶」

「や！ 花札なら三役だな。なるほど、わはは」と、笑う。

「もっといい手にならないか。三光とかサ」と、先生。

「できそうですよ。雨は雨宮さん。松はここ松前藩。桐はと・・」

「おれさ。水戸藩の生まれ。藩紋は葵だが、おれの家紋は桐だ。これで三光できた。こうなるともっと欲がでるな」

「へへ、桜、があっし」

「どうして？」

「背中の彫り物でさ」

「よし、雨入り四光^{しこう}ができた。もう一枚こい！」

「のこるは、薄^{すすき}・・」

「つまり、坊主だろう」と、幻空さんが割りこむ。

「うん、これで五光、手札が揃ったゾ！」

一同大笑いとなった。まったく、鹿次郎先生はどこまでまじめなのかまったくわからないひとだ。

だが、わたしは笑わなかった。桐の絵札には怪しい鳥が描かれている。花の奥からのぞく血の色をしたあの鳥は、子供の時分から気味が悪かった。一体、あれはなんの鳥なのだろう？

火を吹く島の鳥か、それとも江戸城に巢食う鳥か・・

十、鳩

翌朝早く、わたしは森にでかけた。もうすぐ森の樹木、森の生きものたちともおわかれだった。いつの間にか森は、わたしの世界になっていた。

ふと、残雪の上に見慣れない足跡をみつけた。獣ではなく人間の草鞋の跡だ。はなれたりくっついたりして、妙だ。跡をたどった。ひらけた斜面に、鳥飼いがいた。布で覆った鳥籠を雪の上に置いて空をみあげ、風の具合を測っている。わたしは離れた木の陰で様子をうかがった。

鳥飼いは鳥籠に手をいれた。そして鳩をとりだした。手妻に使ったあの鳩だ。鳩の足になにやらくくりつけていたが、ぱあっ、と大空にはなした。鳩は舞いあがり、しばらく頭上で方向をきめかねてぐるぐるとまわっていた。鳥飼いは手を額にかざしてみあげていたが、あわてて背負った小弓に手をのばした。

鳥飼いはすばやく矢をつがえ、大空にむけた。

わたしはいぶかって空をみあげた。白い鳩をねらってふたつの影が迫っている。大鴉だ。鴉のひとつが、さっと鳩に襲いかかった。

ひょう、と矢が飛んだ。ぎゃあ、と悲鳴が大空に走る。

大鴉は黒い羽を空中で散らし、矢を背負って落ちてきた。おそろしい弓の腕前だ。もう一羽は、があがあと鳴いて、逃げた。

鳩は怯えて頭上をふらふらと旋回していた。鳥飼いは懷から笛をだし、口にあてた。

ピッピリリ、ピッピリコピリリ・・

すると鳩は笛の音に励まされたように、意を決して南の方に飛び去った。

ピッピリリ、ピッピリコ、ピッピリリ、ピッピリコ・・鳥飼いは満足そうに吹きつづけた。

わたしもうれしくなり、笛をとりだして吹いた。

ピッピリコピッピリコ、ピリリコピッピリ、ピリリコピッピリ・・

鳥飼いはぎょっとして笛を止めた。わたしの姿を認めると、ふたたび笛を吹きながら、近寄ってきた。わたしはたったいまここにきたように振る舞った。

ふたりは笛を吹き競べた。鳥飼いが吹くと、わたしが模倣し、わたしの調べを鳥飼いが模倣した。そしてふたりは雪の上でぐるぐるまわりながら吹いた。即興の笛の調べは重なって響き、もつれ合って綾なし、追いかけて合って緊迫した。

森の冬鳥たちが集まってきた。クロツグミ、ウグイス、カケス、ヤマゲラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ・・そのほか名も知らぬ小鳥たちが興奮してまわりを飛び交った。そしてシジュウカラも

ウグイスも、賑やかに初啼の喉を震わせた。

そのうち、野兎や、キツネ、リスたちの姿も木立にみえ隠れしはじめた。蝦夷鹿も角を揺らしてあらわれた。

嗚呼、ふたりの笛が、よろこびの響きが、森に春を呼んだのだ。ふたつの笛の音は和して終わった。

鳥飼いは、わたしの肩に手を置いた。

「馬之助さん、見事だ、まったく見事だ。鳥越神社で売りっぱなしで、あっしはなんにも教えなかったのに、こんな上達したとは。あっしなんかより、はるかに巧みだ。あなたは天才だなあ」

「わたしのことを覚えていましたか、やはり」

「もちろんでさ。だって、特上の笛が売れたのは、あれだけ。しかも馬之助さん、うつくしいむすめさんといっしょだった。忘れるわけがない」

わたしはお悠さんを思いだしてしまった。そして笛を口にあててお悠さんの調べをすこし吹いた。

ラララ、ラララ、ララルララル

「・・・いいなあ。その調べにころが洗われるなあ。その鳥笛が、あっしの作った鳥笛が、鳥の啼声だけでなく、こんなにうつくしく、人間の歌を奏でられるとは・・・その調べを模倣しようと思ったけど、馬之助さん、やめましたよ」

「どうしてです、吉蝶さん？」

「だって、その調べは馬之助さんの、恋の歌だ。きっとあのむすめさんへの恋の歌だ。そんな思いのこもった歌を盗んでは悪い」

わたしは鳥飼いをみた。この鳥飼いは忍びだ。弓矢のおそろしい腕前をみてもただの鳥飼いではない。お悠さんもそうだった。この鳥飼いが幕府の間諜であることは、確信に近かった。

しかし・・・と、わたしは思った。この忍びは残忍なところだけを持つているのではない。こころのどこかに清々しい部分を秘めている。先ほどの笛の調べは、なんと清々しかったのだろう。

清々しいところで呼ばなければ、小鳥は安心して集まってこない。そうして安心させておいて、結局は鳥を捕まえる。裏切りだ。それこそ、もっとも残忍なことだ。

清々しさと残忍さ。それを合わせ持つ忍び・・・

鳥飼いとわかれて、わたしはさらに森の奥へ入っていった。吹雪を過ごしたあの洞穴を探し、森の王者に会いたいと願った。

岩も洞穴もみつからなかった。探しているうちにまた迷ってはいけない、とあきらめて帰りかけた。

森のはずれから、ふたりの男があらわれた。ふたりともおなじ格

好をしている。菅笠を目深にかぶり、手甲をし、鳶色の合羽に裁つ着け袴だ。

侍だ。腰に刀を差している。

しばらく侍をみていない。江戸では見慣れた姿が、この森の中では異様にみえる。歩き方にも森の獣たちやアイヌのしなやかさが無い。弓の弦のように全身がひとつに張りつめている。

わたしはどうしていいのかわからなかった。追われている身だから、咄嗟に身を隠した。だが、わたしはすぐあきらめた。こんなところには道があるはずがないのだ。ふたりはあきらかにわたしの足跡を追ってきている。時々、ふたりは雪の上を確かめている。隠れていても、足跡を追われればみつかる。

鳥になりたい、と思った。空に舞いあがれば、足跡は消える。空をみあげた。

嗚呼、わたしは鳩だ。あの鳩のようだ。大鴉に襲われる鳩だ。

「いたぞ」と、低い声がする。ふたりはわたしの姿を認めたようだ。獲物を追ういつものシトカとわたしののように、ふたりの侍は手慣れた動きで、さっと二手に分かれた。

嗚呼、わたしは今度は狩る者ではなく、狩られる獲物となった。

わたしは追われ、狩られる。もう疑う余地はない。

殺される？

青木道場の庭で、血しぶきをあげた侍の姿が目に見えた。ゆっくりと、刈ったばかりの草の上に倒れる・・

いやだ。わたしはたまらなくなつた。やっと行方がみえてきた父に会うまえに殺されるとは。もし生け捕りにされたとしても、拷問だ。そして鹿次郎先生のこともある。わたしが捕まったら、つぎに捕らえられるのは先生だ。

逃げよう。逃げられるだけ逃げよう。そして鳥飼いが放った矢が鳩を助けたように、もしかしたら助かるかもしれない。

わたしは雪の上を走った。森はいまやわたしの世界だ。森の獣のように走った。森に慣れていない侍を振り切れるかもしれない。

予想に反して、侍はふたりともおどろくほど敏捷だった。江戸の侍ではない。雪や森に慣れている。松前藩の侍だ。しかも、実戦に慣れた侍だ。わたしは冷や汗がでた。松前藩の侍なら、殺すかもしれない。幕府の放った間諜だったらわたしを捕らえて壺のこと吐かすだろうが、松前藩なら、あやしいとみたら、うむをいわずに密殺するだろう。吉蝶さんもすでに殺されたのかもしれない。

わたしは雪の上を走った。

侍は左右から迫ってきた。わたしは息をはずませて立ち止まった。侍はわたしが観念したと思ったのだろう。ひとりが抜刀した。白刃は厚岸の海を覆う氷よりも冷たくみえた。

わたしは目をつぶった。雪を踏む足音が迫ってきた。びゅう、と音につづいて、ばしりと激しい音がした。

わたしは目を見開いた。わたしに迫ってきた侍が目前にいた。短い矢が足元に落ちている。刀で払い落とすとしたのだ。そして腰を落とし、刀を構えて振り返り、第二矢に備えた。はなれたもうひとりの侍が、ざざっと雪をはねて走った。敵の目標を変えたのだ。それから、ふたりの侍は物音を立てない。殺戮にひたすら習練している者たち。侍。ひとを殺すための刀。

足元に落ちた矢は鳥飼いのものである。わたしは鳥飼いを目で探した。笛を吹きながら陽気に姿をあらわすような気がした。だが、笛の音もしない。姿もみえない。

時が凍りついたようだった。

びゅう、と、ふたたび音がした。

「ぎゃっ」

はなれた場所の侍が、喉に突き刺さった矢をつかんで倒れた。鮮血が残雪を染めた。

わたしの近くの侍が走った。そして木を盾にして、あたりをみまわした。

ふたたび、時が凍りついた。ばさっと、枝から雪が落ち、静寂を破った。

雪の塊が飛んだ。

侍は木の陰から飛びだした。人影が走り、侍と交差した。侍は刀を斜めに跳ねあげた。影がさっと飛びあがって消えた。

侍はふたたび刀を構え直した。

わたしは息を殺して立ちすくんでいた。手と膝が震えていた。おそろしい戦いだった。気合もなく、もう一方の姿がみえない。と・・

侍があとずさった。ざざっと雪が近くの枝から崩れた。人影が雪とともに落ちた。

「きえっ」と、侍は叫び、白刃が舞った。人影が毬のように転がって、弾けるように侍からはなれた。

侍はゆっくりと傾き、雪の上に音もなく倒れた。

わたしは膝が震えて足が動かなかった。

ララル、ララル・・

鳥笛の調べが流れた。やがてその調べは森のはずれへと遠ざかっていった。

その調べは、どこか、わたしのお悠さんの調べに似ていた。

十一、さらば、お悠殿

もうこれ以上、書きつづけられない。一刻も早くここを脱出しなければならぬ。わたしは昨夜飲み過ぎで寝坊している猪平を叩き起こし、ここを直ちに立ち去る準備を命じた。

これから、わたしはコタンにいく。長老やシトカに内緒でここを去るわけにはいかない。そして書き溜めたこの手記をコタンの長老に預かってもらうつもりだ。

この先わたしの運命がどうなるか、わたしにもわからない。無事帰還して、このつづきを書くことができることを祈るしかない。

鹿次郎先生に危急を知らせるために、そしてわたしがここを直ちに去る決意であることを、手短に文にしたため、猪平に持たせる。わたしがコタンからもどいたら、わたしたちは出発するだろう。

どこへ？

恐らく択捉島まで船で渡り、そこからふたたび、東の島をめざす。波濤を越えて、蜜多きところへ・・・

さらば、お悠殿

馬之助

(第二部 地の果て)